メレク ヤコヴ 米国出身の元ユダヤ教徒（ 半）

:

明:
メレクは大学で 々な哲学を学び、また左翼的な思想にも影 されますが、パレスチナ の支持者であり けます。9 11事件 、彼は偏 とあらゆるプロパガンダを て、クルア ンを んだ に求め けていた真 ます。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 男性

より: メレク ヤコヴ

日16 Jun 2014

集日 16 Jun 2014

私はアメリカ先住民の文化、そして白人 拓民による土地の略 に する彼ら先住民の勇敢さに魅了されていました。アメリカ先住民は 拓民から250以上もの条 を反故にされ、 も住み着かないような荒地をあてがわれました。アメリカ先住民に起きたことは、パレスチナ人に起きたことと 似します。最初のパレスチナ人は、パレスチナの地に数千年に渡って住んでいましたが、ユダヤ教徒たちが突如侵略し、先住民だった彼らパレスチナ人たちは 民キャンプでの生活を いられ、今なおそこで暮らしているのです。私はに、パレスチナ人とアメリカ先住民の いについて いてみましたが、「彼らはユダヤ教徒を皆 しにして、海に放り みたがっているんだよ」といった答えしか返ってきませんでした。パレスチナ人への理解は、私が一度は 者と なしていたユダヤ教徒たちと彼らの指 者たち、そしてラビたちよりも私を上にしたのです。善良なユダヤ教徒であれば、ユダヤ教徒たちの入植のためにパレスチナ人が 戮され、その地から追放されたということを否定することなど出来ません。このような民族 化を彼らに正当化させるものとは一体何でしょうか。それは、多くのユダヤ教徒たちがホロコ ストで されたことなのです!
または、バイブルがそこを「我々の」土地であると述べているからでしょうか?

そうしたことを正当化する 物は何であれ不道 であり、神によるものではありません。

私は高校生のときに哲学に 味を持ち始め、 去の 大な思想家たちの著 をたくさん みました。私は哲学 を する良き友人たちと を ごし、彼らとは真 への苦 の道を一 に みました。私に影 を与えた哲学者の一人は、ユダヤ教徒として生まれたスピノザです。スピノザは17世 のタルム ド神学生で、（ト ラ の中からはどこにも 受けられない信仰である）来世への信仰などを始め、教えられてきたことの全てに疑 を抱きました。事 、多くの初期ユダヤ教徒たちはそうした信仰（来世への信仰）を持ってはいませんでした。スピノザはその思想により、ユダヤ教徒のコミュニティから追放されました。私は彼の持つバイブルの 解を むことが好きでした。バイブルは数多くの矛盾と を抱えており、それを文字通り受け止めることなど出来ないのです。

その 、私自身のユダヤ教へのわずかに残された共感を完全に 拭させた、2 の重要な本をみました。最初の本はアブラハム レオンによる「On the Jewish Question（ユダヤ教徒の疑 について）」です。レオンは第二次大 にベルギ で共 主 者の地下 を 成し、 に拿捕されアウシュヴィッツで死んだ人物です。彼の本は「なぜユダヤ教徒たちは生き らえてきたのか」という 年存在している疑 に答えました。彼は古代から近代に渡るユダヤ教徒の 史的 告を げ、その生存が奇 によるものではないことを 明しました。カ ル マルクスの言 を借りると、「ユダヤ教徒たちは、その 史にも わらず生き残ったのではなく、その 史のおかげで生き残ったのである。」まず彼は、エルサレムの破 前にどれ程のユダヤ教徒が自らの意思でイスラエルを去ったのかについて示します。それから、中世 代の君主や 族たちにとって、ユダヤ教徒たちが仲介人として 重な存在であったことを 明します。そして 本蓄 の 程を通し、いかにユダヤ教徒の地位が下降 を辿り、やがて高利 しによって迫害されるに至ったかを示します。

私に影 を与えた2 目の本は、リチャ ド エリオット フリ ドマンによる「Who Wrote the Bible?（邦 ：旧 を推理する 本当は が いたか）」です。彼はスピノザの 史的命 を します。この本では、ト ラ が には4人の手によって かれたことが 明されます。またフリ ドマンは、古代イスラエル王国とユダ王国による2つの なるバイブルの 承が存在していたものの、 纂者がそ

れら2つを み合わせ、 在私たちの手元にあるバイブルの形になったことを 明しています。

友 と哲学について むこと以外にも、私たちは多 な政治的 に参加しました。私たちは共和主 から共 主 まで、あらゆることを しました。私はマルクス、レ ニン、スタ リン、毛、そしてトロツキ の全著作を みました。私はマルキシズムから、人生に欠けていたものを 出しました。私はすべてに する答えを つけ出したと思い み、自分が他人よりも れた知能を持っているかのように感じていました。私たちの「哲学 （と私が呼んでいた集まり）」は、自分たちで小さな社交クラブを作りました。私たちは色々な社会 家によるイベントや抗 集会、ストライキなどに参加しました。

アメリカの左翼 体が取り んでいるカルト集 のすべてと出会った 、私たちは皆、真 を拒した行いをする彼らに し、「このような人々のいる国家では革命など起きやしない」と嫌 感を抱くようになりました。 去の手法に るのでは、社会的 化のための 争に つことは出来ないのです。

私は革命のための 争は めましたが、パレスチナ支持 体の 事として活 するようになりました。私はこの に自分の情 を注ぎ みました。私たちの 体は非常に小さなもので、主流派から攻 されたりもしましたが、そのことは私たちに りを持たせました。私は世界にし、すべてのユダヤ教徒たちが 者ではないことを知って欲しかったのです。私は 去に尊敬していた人々がイスラエルの抑 政 を支持していることを じていました。イスラエルによって せられる嘘は、ホロコ ストの否定に他ならないのです。

私はユダヤ教を て、 世こそが人 の目 なのだと なしていましたが、 神 者になることはありませんでした。しかし、私はすべての 宗教に して憎 し、それらは 力者が人々の行 をするための道具に ぎないと思っていました。アメリカにおいて、科学を否定したり、古い白人的 を支持したりするキリスト教原理主 者たちの行いを ていれば、なぜ私があらゆる宗教に して 疑的であったかが分かることでしょう。ユダヤ教徒たちがパレスチナ人に して行っていることも、そうした考え方に拍 をかけました。 の片隅ではまだ神を信じ けていたものの、宗教をなくした私は大きな空虚感にとらわれていました。 に

は宗教的な人の方が、幸福な人生を送ることが出来ているのではないかと感じていた程でした。

正直に言うと、 年に渡る い反宗教的感情を持っていたが私が、何をきっかけにイスラムに 味を持ち始めたのか えていません。子供のとき、母がイスラ ムについて、ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が私たちと同じ神を崇 し、ユダヤ人とアラブ人がアブラハムを通して があることを していたのは えています。それゆえ、ある意味ではイスラムのことを、神を崇 するもう一つの宗教として めていたと言えるかもしれません。また、（ハシディック派の） 兄弟が私に、「もしユダヤ教徒がユダヤ教徒としての人生を て、ムスリムのように生きたのであれば、彼は罪を犯すことはなくなるだろう」とっていた があります。 去を思い返してみて、そのような言 を耳にしていたことに自分自身 いています。

9 11事件が起きたとき、ニュ スによる反イスラ ム的プロパガンダが急 しました。私は最初から、それらすべてが嘘であることが分かっていました。なぜなら、メディアはそれを支配する人々の利 を保 するものという 点を既に持っていたからです。イスラ ムにする最も好 的な人々がキリスト教原理主 者たちだということに 付いた私は、イスラ ムにより 味を抱くようになりました。私は活 家としての 期に学んだことについて、神に感 しなければなりません。社会とメディアについての知 なくしては、テレビでイスラムについて きしたゴミを全て信じ切ってしまったことでしょうから。

ある日、 かがバイブルにおける科学的事 について すのを いた私は、クルア ンにもそのような科学的事 があるのかどうか知りたいと思いました。インタ ネットで 索すると、多くの 的な事 を つけました。それからは、イスラ ムの 々な 面に する 事を むことに多くの を やすようになりました。私はクルア ンが一 して 理的であることに きました。クルア ンを み め、その 理的教えをバイブルのそれと比 し、いかにクルア ンの方がより れているかについて理解するようになりました。また、クルア ンはバイブルのように退屈ではなく、 しんで むことが出来ました。5ヶ月に渡る集中的な勉 を て、私はシャハ ダ（改宗のための信仰宣言）をし、公式にムスリムになりました。

私の 去の宗教と なり、イスラ ムはそのすべてが理にかないました。礼 やラマダ ンの断食などの 践もより良く理解出来るようになりました。私は 々な戒律を うことにおいて、イスラ ムはユダヤ教のようなものだろうと思い んでいましたが、それは いでした。私の自分自身の世界への理解も、イスラ ムの教えと 和しました。それは、すべての 宗教は同一であったものの、人によって 代と共に腐 させられた、というものです。神は、ユダヤ教やキリスト教という名前をつくり、人 にご自分を崇 させるようにしたのではありません。神は人 にイスラ ムを教えたのです。それはつまり、彼のみに服 するということです。それは至 明白かつ なことです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/1470

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。